

後、急速に人氣が衰えて廃れてしまった祈願サイトもあれば、現在まで多くの祈願者を抱えるサイトもある。(②祈願対象は抽象的なもの)祈願対象は画像で現れた場合もあるが、多くはインターネットというバーチャルな世界に限定され、具体的なモノの形で現れていない。(③宗教者が関与しない祈願者の自発的行為)これらの祈願サイトには宗教者が一切関与せず、いずれも祈願者の自発的な祈願行為として成立している。

また、これらの「受験の神」の出現は中国の宗教復興を背景に、人々の宗教的需要の増加を基盤としている。八十年代以降に生まれた新たな宗教的ニーズの一つとして、「難しい大学受験に合格するための祈願」が黄強により指摘されている(黄強『市場経済化する宗教——中国上海市における道教の変遷と復興』二〇一〇、四四)。もちろん、大学受験だけではなく、「難しい各種受験に合格するための祈願」も大きな宗教的ニーズとなっている。その一番の受益者である大学受験生と大学生をはじめとする若い年齢層は、とりわけ、熟知しているインターネットと自身の宗教的ニーズを結びつける主力になっている。今後は、中国の宗教復興の事情を加味しながら、インターネットにおける宗教の新たな動向に注目し、日本の事例との比較検討を行っていきたい。

政治権力と宗教権威

米井 輝圭

ひとつの宗教が政治にほとんど包摂されているようにみえているような場合にあっても、そこに独自の権威を保とうとする

力が働くかぎり、一個の「宗教」として存立し、宗教的権威を発揮することは可能である。本発表では、一例として十二世紀の陰陽道をとりあげて、政治の場における意志決定のプロセスへの関与という機会を通して、当事者が宗教としての権威を維持し、かつ主張していこうとしたことを検証する。

当時の神祇信仰や仏教が王権と相依的な関係にあったのに対して、陰陽道は朝廷の一部局である陰陽寮官人の仕事とされており、一個の宗教としての自立性は弱いようにしばしば思われている。しかし、独自の神や祭儀を成立させ、信者と執行者との信念と儀礼の場において結ばれているという意味において、それは宗教としての要件をすでに備えるに至っていた。そもそも令制において陰陽寮とその職掌が官制の枠内のみにとどめられたのは、宗教たるべき可能性を欠いていたからではなく、むしろ、国家の安泰をも脅かしかねない危険な宗教運動に発展する要因をはらんでいたゆえにとられた処置でもあった。

当該時期の陰陽道は、官人としての陰陽師が担った。貴族社会の上層部に位置してはいなかったとはいえ、政治的な意志決定においては、その知見が左右することになっていた。朝儀の日時勘申の場合、最終的には議政官たる公卿が判断を下すが、原則として陰陽寮の提出した候補からのみ決めるのが原則であり、上卿といえども勘文を無視することは出来なかったのである。そうした場面は日常的な小事に限られていたが、しかし政治的な混乱期には、陰陽師が重大な決定を左右するような局面も突発的に発生する。そこでの振る舞い方次第で、権威を高めるか逆に失墜させるかが問われるようなことも起ったのである。

実際に、大事にあたって陰陽師の意見が対立し、片方が相手の意見内容の問題点を一喝して権力に非迎合な意見を通すことで、陰陽道が独自の権威をよく發揮し得たように見えた瞬間があった。福原遷都に関する方角禁忌が平家主導で議論された時のことである。

貴族社会のおおかたの気分が遷都に否定的である中で、陰陽道の一方の主役たる安倍泰親は、その雰囲気合致する形で「より正統な」専門的見解を出し、その光景は貴族たちに安心感と信頼感をもって受け取られた。他方で泰親の子の一人である季弘は、正当性においては劣るが強権に迎合する形の見解を出すというやり方で、道が決定に大きな役割を果たす道を選んだが、これは失敗に終わったのだった。季弘のちに「木曾祈師」であったとされて処分されているが、その時点での強権ではあっても貴族社会全体としては異端となる権力者に合わせようとする方向性は、陰陽道の信頼性や権威を高めることにはつながらなかったが、ここで明らかになったのである。平家や木曾義仲の一派が減んでも貴族社会は残り、結果的に陰陽道の権威を守って印象づけたのは、泰親の立場であった。

泰親はのちに後鳥羽天皇が皇位継承者に選ばれる時において後白河院の意向に添うなどの行動もしているから、権力迎合という側面が彼になかったわけではない。しかしそれ以上に、貴族社会の全体的な意向を読みとって満足させることを彼は重視したのである。強権者と貴族社会主流とが乖離した状況下で行われた福原遷都問題の議論こそは、そのことが成果としてはつきりと現れた場にほかならなかったといえよう。

泰親をはじめとする陰陽師たちのこうした判断を可能にしたのは、陰陽道が貴族社会をこそ支持の基盤とし、また彼ら自身も貴族社会の一員であるということをよく自覚していたという事実によるものであった。こうして、陰陽道は貴族社会の存続にとって不可欠なものと認識されたがゆえに、その宗教的権威をよく保つことができたのである。

協働表象（論）の基礎的考察

永岡 崇

本報告は、ある宗教伝統の中で伝承されている信仰的遺産（教祖、教典、教義、儀礼など）をめぐる表象に際して、異なる立場の人びとの間の相互依存関係によって生成する新たな宗教文化（＝協働表象 collaborative representation）の領域を浮き彫りにし、その意義を明らかにしようとするものである。

近代社会においては、信仰当事者ばかりでなく、宗教研究者、ジャーナリスト、文学者などの非信仰者も積極的に宗教をめぐる表象を行ってきた。それぞれの立場に応じて、信仰的遺産について語ることの目的や関心、信念は異なっている。だがその一方で、いずれの立場の者も、信仰当事者によって伝承されてきた諸テキストを読むことを通じて信仰的遺産に接近するしかなく、また他者の表象の影響を受けざるをえないという意味で、相互依存的な一種の共同性を形成しているとみることもできる。こうした共同性を、信仰的遺産をめぐる（読みの共同体）と呼ぼう。

テキストを読むという行為によって結びつけられる（読みの